

月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

〈EKUTEBIAN-VOL.7. JANUARY. 1990-EKUTEBIAN〉

1



まい あーと
■押し絵羽子板
by 水野福水

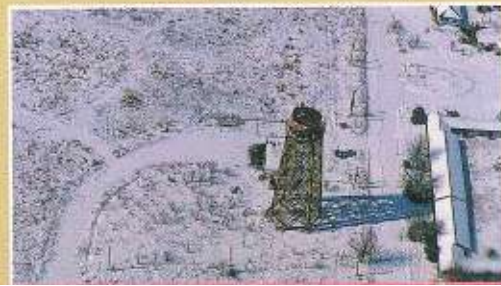


たちかわ異景

街の光景は日々に変化しているのに、私たちの眼はいつの間にか「時の舟」の上で横眠をむさぼって、命の躍動を見逃してしまう。

藤田さんはタチカワ・エア・ベイスが残っていた「光と影」をもとめて、今日のたちかわに焦点をあわせシャッターを切る。「視る人」が見ると、街はこんなにファンタスティック！

撮影／藤田 悟
今年の「えくレンびん」は藤田作品



街、なごむ

——第五回「ベスト立川人・展」点描——



えくてびあん エアメール ポツクス

漢字テスト
空欄に一字挿入を試みよう。
●当意 妙
●情 径 行

●1月7日●
立川市消防出初め式
ところ:若葉小学校
時間:9時25分~
※詳しくは ☎2111 西268

ユニークな活躍をしている立川人を一堂に会しての写真展「ベスト立川人・展」は第五回記念とあって、ウエル・ホール(立川駅9階)を会場とし、12月1日から5日までおこなわれた。これも初めての試みだが市民参加のミニコンサートも同会場で開催され、例年のない雰囲気を感じさせた。

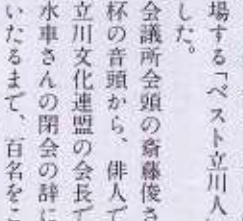


青木市長、ミス立川らも興味ぶけに観覧

アジスアペパでのタクシー・買物事情についてお話ししましょう。タクシーは白と青のツートンカラーで、上にアムハラ語で行き先の表示がしてあります。路線タクシーといってもいいでしょう。また、乗り合いタクシーと言われても顔を見せ

今回の「立川人・展」に登場したのは、総勢26名。ウインブルドンバドミントン国際トーナメントで初優勝した田所姉妹、ヒマラヤのチユルチユル南峰の初登頂に成功した立川女子高東洋人として初めてモーツァルト中央研究所員に選ばれた海老沢敏さん、またママさんコーラスで全国大会賞を獲得してきた「ボーチエたちかわ」等、一年間の立川人の活躍が一目瞭然。「へええ、この街にもこんな人がいたのか」という声が例年のように聞かれ、一人一人の個性をいかした活躍ぶりに感嘆の声があがっていた。特に、ご自分の遺像を記念してのコンサートを開いた井上みちこさんの写真の前では、その「若さ」とユーモアあふれる企画に拍手をおくっていた。

開展早々の初日には、青木市長も顔合せをした。



立川商工会議所会頭の斎藤俊さんと、元立川文化連盟の会長でもある谷川水車さんの閉会の辞にいたるまで、百名をこす立川人が終始なごやかに歓談された。

立川市少年少女合唱団と、コールキルシェ(佐藤公孝指揮)、立川八中、シンセサイザー

立川市少年少女合唱団と、コールキルシェ(佐藤公孝指揮)、立川八中、シンセサイザー

いるもので、運転手を入れて5人乗りものからトラックの荷台を改造した14人乗り等、まちなちです。日本のように自分の行き先まで行ってくれるのではなく、路線と自分の行き先が合っているか検討の上、乗る訳です。同じ方向に行く人がいれば、当然同乗になります。しかし、中には夜7~8時頃になると路線を変更したり、料金を高く請求してきたりする者もいます。交渉次第で家まで行く事もあります。外国人だとものごく高くてきたりして、中々うまく交渉できるものにはありません。というの表示以外はありませぬ。この表示を剥がして走るの夜とかなの時など警官があまりいないときです。昼

問から担当以外の、よりお客のたれる路線を走るタクシーもありますが、警官もよく見ている、結構取り締まっているようです。さて、買物ですが、この国の大きなマーケットは全て国営です。その他にプライベートの店やマーケットがありませぬ。これは言わば「やみ市」のようなものかとも知れませぬ。国営マーケットで買物をする時には、いろいろ面倒な手続きが必要な上、長い行列を作らなければなりません。その点、プライベートのマーケットは楽ですが、国営よりだいぶ値段が高くなりがちです。



ある時期に国営マーケットで一人3個ずつ乾電池が売られたとします。その時は長い行列を作り、中にはとてもそれを使うようなラジオ等、持っているにいな人まで来ます。そういう人は、電池を買ってから自分のちの仕事代として「USE」をとして「USE」をとして「USE」をとして「USE」

アンサンブル(藤田猛指揮)、立川管弦楽団より音楽アンサンブル(フアゴット・田中純ほか)。立川マンドリン倶楽部(古田栄治ほか)。ボーチエたちかわ(藤堂元二郎指揮)。ラ・ルミエール(オーボエ・伊藤博ほか)。アンサンブルドルチェ(バイオリン・本田純一ほか)の演奏、あるいは合唱が初日を除く4日間つづき、写真展に花をそえた。

この新しい試みをさらに生かして、今後の「立川人・展」のあり方が検討されることであろう。

五回を重ねたこの写真展に登場した立川人は、総勢百三十人にものぼる。国際的、あるいは全国規模で活躍している人もさることながら、人しれず自分の道を切りひらいてきたひと、趣味をいかしてユニークな分野を開拓するひと、これから、たくさんの立川人が、私たちがの生活を彩ってくれることである。師走の慌ただしい街が、少しなごんだけかにみえた5日間であった。

真如苑たより

いよいよ、新しい年の始まりです。昨年は平成元年ということでしたが、1月7日までは「昭和」でした。「全き平成」は今年からです。

平成二年もどうぞ、真如苑をよろしく頼みます。お返しにあげます。

日時 1月22日(日) 午後3時~5時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてあります。

■立川立民(成人)に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパクト」(本誌を手渡してくれた人)へ。

表紙は語る

お正月の遊びのひとつ羽根つき。今月の表紙になっているこんなステキな羽根板で、羽根がついたらさぞかし優美でしょう。さて、作者の水野さんにお話を伺ってみました。

「手工芸研究会というところが小金井にありまして、押し絵やつまみ絵など10種類以上の手工芸品を手がけています。その中でも押し絵、紙人形を好んで作っています。ただ、人形の顔はともむずかしいので、会のなかには、福田先生に手を入れて頂いておられます。キヤリアを伺ってみると、もう20年からの実績をもたれる水野さん75才。ご自身も、手工芸研究所 春園会会師範として活躍されています。人形の心はよく顔にあるといわれますが、なかなか難しいようではありますが、「作品は一日で出来るものではないので、完成までの日数がとても楽しめず、何かを一生懸命にやれることは、とてもステキなことですね」。



給与振込は (ハートの銀行)

全国約360か店の便利さを ご活用ください。

心のおれを大切にする

ハートの銀行

◎第一勧業銀行

「成人を祝うつどい」

日時 1月15日(月) 13時より

場所 ▼市民会館大ホール

主催 ▼立川市

「新春市民かるた会」

日時 1月21日(日) 13時より

場所 ▼高松会館

主催 ▼立川明静かるた会

「市民駅伝大会」

日時 1月28日(日) 9時30分より

場所 ▼多摩川緑地サイクリングコース

主催 ▼立川市教育委員会 立川体育協会

主管 ▼立川市陸上競技協会

「たけなかかわ」

日時 1月15日(月) 13時より

場所 ▼市民会館大ホール

主催 ▼立川市

立川クイズ

街路樹を植えたり、ブロック塀を生垣にしたり、街では今、緑化緑といわれています。樹木、草地、農地と、いろいろありますが、まずは、その「樹木」について……

立川市全域で幹まわり15cm以上の樹木は2,608本、そのうち幹まわり30cm以上の大木は78本もあります。さて、市内で最も大きい樹木は……

◎1 柴崎町・八幡神社跡のケヤキ
◎2 妙川・流泉寺のイチヨウ
◎3 一番町・玉川上水のケヤキ

(12月号の答え) ①

昔の立川の結婚式では、花嫁さんが花婿どりの家につきますと、玄関からは入らないものでした。とんぼ口(勝手口)から入りまして、そこで酒の入った盃をちよっと口にすする、これを「とんぼ盃」といいます。昔のこと、です。

工房から

●あたらしい歳の暮が閉まりました。どんな一年になりますやら。わずか、三六五日しかないのに、たとえば去年だけでも、新年早々に昭和天皇の崩御に接しましたし、政治的にはリクルート事件、消費税問題との列島は揺れにゆれました。今年も揺れるに違いありません、地震国ですから。

●「ベスト立川人・展」も大過なく終了することができました。登場して下さった方はもちろんのこと、おおくの方々に御力を添えただきまして心から御礼申し上げます。

●「いももんですねえ、ジンプック」この立川にも」という言葉を会場で耳にすると、少し誇らしく、今年も「立川人・展」をやったよかったです。しみじみ思ひひと時でした。

●えくてびあん 古き都や松の内

(編集) 石塚敦美 小川知子 神山清子 関川理 山田嘉子 中村昭雄 中村正弘 藤田信子 (写真) 天野武男 飯橋一明 吉田義彦 スタジオ268 植川一也 本多修

平成二年一月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
ボーチエハイスト500-1101
電話 042-558-0882

編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 株式会社

月刊 えくてびあん 第66号

平成二年一月一日発行

発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
ボーチエハイスト500-1101
電話 042-558-0882

編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 株式会社

第7回

我家は3代目

老舗といひ暖簾の重みという。それも3代つづけば語り尽くせない物語がある。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそここに隠されている。

鮮やかに咲く筆墨三代

石田耕堂書塾(高松町3丁目)

初代耕堂師の指導は厳しかった。その中から2代目青蘭師、その妹冬扇師、共に書道家として立つ。3代目仙娘師は後つぎになるよう言われたことはなかったが、書にかけたことはなかったが、書にかけられた祖父、父母、叔母の姿を見て育ち、やはり書道家に。来年開塾55周年を迎える。89才の今もなお研鑽積む耕堂師を中心に、それぞれ進む、書の道である。



耕堂師が、酒造会社に頼まれて書いたラベルの数々。

生まれた時に「仙娘」の号を買った3代目。11月に開催の2人展にて。



右から石田青蘭さん、眉山さん、沙希ちゃん、仙娘さん

「最初は画家にならうと思っていました」という仙娘師、学校中、墨の匂いのしているような大学へ進んで後つぎとしての意識にめざめた。2代目、3代目、共に書道が取りもつ縁で結婚。親子3人そろって毎日賞等を受賞している。